

令和6年度 福岡市総合教育会議

議事録

○ 日 時

令和6年11月26日(火) 11時05分～11時47分

○ 開催場所

福岡市立東吉塚小学校 3階図書室

○ 出席者(7名)

市長 高島 宗一郎

教育委員会 石橋 正信(教育長)

町 孝

原 志津子

武部 愛子

徳成 晃隆

沖田 由香

○ 議事次第

1 開会

2 市長挨拶

3 教育長挨拶

4 議事

(1) 協議事項

① 教育データ連携基盤の構築について

② 次期教育振興基本計画について

③ 不登校児童生徒への支援の充実について

(2) その他

5 閉会

※ 開会前に「理科の授業(プログラミング的思考)」を視察(約15分)

概要

○「教育データ連携基盤の構築」、「次期教育振興基本計画」、「不登校児童生徒への支援の充実」の進捗状況と今後の方向性について、教育委員会事務局から説明し、意見交換を行った。

(主な意見)

＜教育データ連携基盤の構築について＞

- ・教育データの活用は、伴走者としての教員の役割において、子どもを多角的に見ていく上で非常に力になる。また、教員の負担軽減への効果も期待できる。
- ・子どもたちにとっては、一人ひとりの学力の変化や理解度に応じたサポートを受けられることが期待できる。また、心の変化やSOSを見落とさないといったところについては、子どもたちに加え、保護者も安心することができる。
- ・個人情報と切り離れた上で、大学等の民間での先進事例や研究もあるかもしれない。うまく組み合わせながら、今後の活用を検討してもらいたい。

＜次期教育振興基本計画について＞

- ・推進にあたっての共通の視点として、Well-being と DX の二つが掲げられていることが特徴的。
- ・子どもたちの Well-being を高めるためには、まず、教員の Well-being を確保することも必要であり、学校が教員の Well-being を高める場となることが重要。
- ・良い人材に教育の世界に入りたいと思ってもらえるよう、DX を進めて教員の負担軽減を図るなど、働き方改革を進める必要がある。
- ・これからの社会では、新しいものを創り出す創造力や、他者と協働してチームで問題を解決する力がより一層求められる。次代で活躍する子どもたちを育てるため、教育委員会がリードしなければならない。

＜不登校児童生徒への支援の充実について＞

- ・一人ひとりの状況に応じた多様な支援が必要であり、新たな選択肢として、学びの多様化学校である百道松原中学校が開校することについて、子どもたちや保護者からの期待は大きい。
- ・時間的に余裕を持った時制の中で、人との関わりを楽しめるような、その土台を作っていきたい。これから出会う色々なストレスに対応できる力を育てていきたい。
- ・この学校ができてよかったなと感じて卒業していただけるように、一人ひとりに寄り添った形で進めてもらいたい。

議事録

発言者	発言内容
高橋企画調整部長	定刻となりましたので、これより、令和6年度福岡市総合教育会議を開催いたします。 本日の司会を務めさせていただきます、総務企画局企画調整部長の高橋でございます。よろしくお願いいたします。 それでは開会にあたりまして、高島市長よりご挨拶をお願いいたします。
高島市長	おはようございます。 教育委員の皆様におかれましては、日頃から福岡市の教育行政の推進に大変お力添えをいただいていることに、まず感謝を申し上げます。 今日の会議に先立って、皆さんと一緒に授業を拝見させていただきました。プログラミング的思考の授業でしたが、実践的な題材に対して、ICTなどを駆使して取り組んでいました。あまりにも我々の学生時代と違って率直に驚きを受けましたし、高度な取り組みを行っている学校の教育を心強く思いました。このような形で、プログラミング的思考、それがどう具体的に自分たちの日々の生活の利便に結びつくのかということも、非常にわかりやすいテーマで取り扱っていたと思います。こういったことが好きな子どもは、今まさに人材不足となっているエンジニアの方向に、これをきっかけに進む子も出てくるんじゃないかなと想像しながら、本当にすばらしい授業を見せていただきました。学校関係の皆様本当に感謝を申し上げます。 さて、今日のこの総合教育会議においては、そのような新たな学びを生み出していくための教育データの活用、また、現在策定中の次期教育振興基本計画、それからいよいよ来年の4月に開校いたします学びの多様化学校といった三つのテーマにつきまして、現在の状況を聞かせていただきながら、意見交換をして、今後の方向性について皆さんと共有したいと思っています。 短い時間ではありますが、教育委員の皆様と連携を深める素晴らしい機会でございますので、今日はどうぞよろしくお願いいたします。
高橋企画調整部長	続きまして、石橋教育長からご挨拶をお願いいたします。
石橋教育長	改めまして、おはようございます。 市長におかれましては、大変お忙しい中、総合教育会議を開催していただきまして、本当にありがとうございます。 先ほど市長からありましたように、本日は、データ駆動型教育への転換に向けたデータ連携基盤のデモンストレーションをご覧いただき、率直なご意見をいただきたいと思いますと思っています。プロトタイプですので、完成に向けて今後またプログラムを作ってまいります。いただいたご意見を踏ま

	え、有意義な形になるようにしたいと思っています。 それと御礼でございますが、先ほどありましたように、学びの多様化学校が来年4月に開校となります。優先的に予算を配分いただきまして、本当にありがとうございました。誇れるものを作って参りたいと思います。 今回も含めまして、市長からいただきましたご意見を生かしながら、今後の教育行政を進めて参りますので、よろしくお願いいたします。
高橋企画調整部長	それでは議事に移ります。 本日は、「教育データ連携基盤の構築について」、「次期教育振興基本計画について」、そして、「不登校児童生徒への支援の充実について」、この三つの事項について意見交換をお願いしたいと思っております。すべての協議事項について教育委員会事務局から説明をいただいた後、一括して意見交換を行う形で進めてまいります。 会議終了は11時40分を予定しております。 それではまず、教育データ連携基盤の構築について、教育委員会事務局より説明をお願いいたします。
齊藤指導部長	指導部長の齊藤でございます。 子ども主体の学びの実現に向けた学びの改革について、資料に沿って説明をさせていただきます。資料1－①をお願いいたします。 これまでの学びは、言われたことを言われた通りに行う、「受け身の学び」、または、すべての子どもたちが同じ内容、同じペースで進める、「画一的な学び」が多く見られておりました。このような学びについては、子どもたちの個別で多様な学びへの対応に課題もございました。 そこで、これからは、子ども自身が目標を立て、計画し、実践し、また振り返りをするといった、自らの学びを調整する「子ども主体の学び」が重要になってまいります。この学びの実現において、教師は、子どもの学びを支えるサポーターであり、ファシリテーターとして、子どもの学びの伴走者としての役割を担ってまいります。 そして、今後は、教育データを活用することにより、よりきめ細かな指導や支援を可能にしていくことができると考えております。そのために、学習面や生活面の様々なデータを集約・蓄積し、必要な情報をまとめて見ることができる「ダッシュボード」、そして蓄積した様々なデータをかけ合わせて、子どもの学力の変化や、心の状態の変化の要因や傾向を分析する「分析システム」を開発していくこととしております。これにより、すべての教師がデータを活用していくことで、子どもの多面的な状況の変化にいち早く気づき、適切な指導や支援を充実させるとともに、分析による客観的根拠に基づく効果的な指導や支援が行え、子どもの力を最大限に引き出すことが可能になると考えてございます。教育データ連携基盤の具体的な活用方法につきましては、教育ICT推進課長より詳しく説明をさせていただきます。

永田教育 ICT 推進課長	教育 ICT 推進課長の永田でございます。 私、約 30 年間学校の教員をしておりまして、令和元年から教育委員会事務局に参りまして、GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末の導入や活用、オンライン授業など、ICT 関係を中心に仕事をさせていただいています。現在、文部科学省の学校 DX 戦略アドバイザーを拝命し、市立学校の DX を進めるとともに、他の自治体の教育委員会に対してもアドバイスをしているところでございます。 説明を今からさせていただきますが、その前に、当課で、教育 DX の動画を作成いたしましたので、見ていただきたいと思います。 <動画視聴> このように、1 人 1 台端末を使って子どもの教育データが貯まっていく中で、我々は、新たにこの教育データを活用したいと思っております。 私も教員を長くしており、休みがちな子どもに対しての指導を今までどういうふうにしてきたかという、1 日休んだら、家に電話をしています。「大丈夫ですか」と。2 日連続で休んだら、やはり電話をしますが、本人に代わってもらようにしています。本人に代わってもらって、「どげんね、大丈夫ね」と声を聞きながら、その子の本心を掴む。そして 3 日連続休んだら、もう家庭訪問に行くようにします。これはなぜかという、自分の経験の中で、1 週間休みが続くと、もう不登校になってしまうということがあったものですから、そういった指導をしてきています。ただ、これはあくまで私の経験、感覚なんです。これに教育データを合体させることで、経験が豊かな教員、ベテランの教員は客観的な根拠に基づく指導効果の裏付けができる。それから、経験が少ない先生も多いです。教育データは、そういった先生の道しるべや判断材料にもなります。 また、すべての教員の働き方改革にもなると考えています。 これまでの国と福岡市の動きですが、令和 3 年度、市長も参加された教育再生実行会議でデータ駆動型教育への転換が言われました。そして、さらに国の方で教育データの利活用のロードマップを策定し、今後どのように教育データを使っていくのかということが示されました。福岡市教育委員会といたしましても、これを進めていこうと、令和 4 年度に福岡市の教育データ活用のロードマップを作成しました。そして令和 5、6 年度には、教育データの連携基盤のプロトタイプを作成してきたところでございます。 では、教育データ連携基盤とは何なのかということですが、今まで、テストの点数、出欠席や指導の記録などは、それぞれのコンピューターのローカルファイルに、それぞれのシステムが入っていました。そこで、私たちはクラウド上にデータ貯蔵庫というものを作りまして、それらのデータを全部入れていったところでございます。データ貯蔵庫の中に必要なデータがいっぱい貯まりました。そこで、先生たちがそのデータから必要なデ
----------------------	--

ータを一元的に見られる「ダッシュボード」、それから我々が貯めたデータのどれとどれが関係するのか、どんな関係があるのかということを探る、「分析システム」を作ったところでございます。

集める主な教育データですが、定期テストの正答率やドリルの進度、授業の理解度を表した学習面の「スタディ・ログ」、それから、出欠席や心の状態を表した「ライフ・ログ」、それから、子どもからの悩み相談や家庭訪問など、指導や支援を記録した「アシスト・ログ」、この三本立てで進めているところでございます。

では実際に、ダッシュボードを見ていただきたいと思います。これは架空のデータでございます。

校長や教頭が見る画面ですが、こちらに欠席情報が表示されています。連続欠席が出た子や累計の欠席が多い子です。こちらは、心の健康観察アラートといいまして、毎朝、子どもたちが朝の会で自分のコンディションを入力します。青がニコニコ、緑が普通、オレンジがモヤモヤ、赤がイライラ。やはり、オレンジや赤が付いた子は注意して見守らないといけません。さらに、子どもがコメントを書くこともできます。そして、ここは保健室の利用状況が表示されます。相談のために保健室を利用する子も多いため、大切な情報だと思っています。

さらに、「生徒指導案件」という表示ですが、子どもに関わった実績などの内容はここに書かれることになります。

学力・学習面の記録も表示されます。

今見ているのは、校長や教頭が見る画面になります。ただ、こちらの「クラス」というところを押しますと、今度は学級担任が自分のクラスだけを見る画面になります。さらに、気になった子どもにズームインしたい。そのために、「生徒」というボタンがありまして、子どもたち一人ひとりのコンディションを見ることができます。

ここで、学校の状況を考えますと、先生たちはずっと机に座ってこれを見ているわけではありません。授業をすることが基本です。となると、見落とす可能性があります。そのため、アラート機能を付けています。それが「今週のピックアップ情報」です。例えば〇〇さん、「心の健康観察でアラートが続いています」、「理解度が低下していますよ」など出ている。先生たちはこれを見て、「自分もちょっと感じていたけど、やっぱりそうなんだ」ということもあると思いますし、「気づかなかったけど、アラートで知れてよかった」ということもあると思います。先生は、アラートの出ている〇〇さんにズームインし、〇〇さんのコンディションをしっかり見て、指導を行うことができます。

これは、校長や教頭も同じように見ることができるので、複数の目で子どもたちを見守ることができます。担任の先生が気づいてなくても、言い出しにくくても、校長や教頭が、「あなたのクラス大丈夫、あの子アラー

トが出ていたけど」と、言うことができます。

次に、分析システムの説明に移ります。たくさんの情報が出てきていますが、これらの相関をまとめてみました。関係が深いものは色が濃くなっています。一部拡大して表示します。このように数字の大小が相関の目安になっておりまして、数字が大きいほど相関が強いということになります。

いろいろありますが、今回注目したいのは、読書習慣と定期テストの点数の関係です。「本をよく読む子は勉強ができる」ってよく聞きますよね。これは本当なんでしょうか。数字は0.44なので、弱い相関があるようになっています。これだけでは少しわかりにくいので、我々が作った分析システムにかけてみます。これは、他の自治体では恐らく実施しておらず、すごく先進的なものだと思っております。横軸にテストの点数をとり、縦軸に読書習慣をとります。縦軸の一番上、一番本を読んでいる子どもたちは、横軸に出ているテストの点数を見ると、低い点数の子はあまりいません。高い点数の子は、プロットが詰まっているということで、多いことがわかります。一方、本をあまり読んでいない子どもは、点数の低いところから高いところまでまんべんなくいる状況です。本を読んでいる子でも、高い点数を取れている子がいるということは注意しなければいけないと感じます。

そして、もっともこのデータからわかることがあるんじゃないかということで、生成AIを使ってみます。生成AIの活用において重要な命題ですが、「あなたは教育データの専門家です。このグラフを分析して、傾向、相関、考察をしてください。」と入れてみました。出された結果の中で気になるところを抜粋しますが、「読書週間が学習成績に良い影響を与える可能性が考えられます。しかしながら、本をたくさん読むと成績上がるということではなく、他の要素も関係していることは考えられます。」とあります。今回は我々の分析と同じような結果が出ていますが、我々が気づかないところがあるかもしれませんので、生成AIを活用しているところでございます。

最後に、今後のスケジュールです。

今、プロトタイプを構築いたしまして、モデル校9校での試行検証を行っております。市長におかれましては、予算を配分していただきありがとうございます。令和9年度に全校に展開しようと考えていまして、そのために、令和7年度に教育データ連携基盤の本番のシステムを作ります。そして、令和8年度には改めて試験運用をして教員の操作研修を行います。

非常に先進的なシステムだと考えておりまして、他の自治体に先駆けて取り組んでいるところでございます。しっかり進めてまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上でございます。

高橋企画調整部長	続きまして、次期教育振興基本計画について、教育委員会事務局から説明をお願いいたします。
中尾総務部長	総務部長の中尾でございます。 現在策定を進めております、令和7年度からの次期教育振興基本計画案につきまして、その骨子を説明いたします。 資料2をご覧ください。 次期計画につきましては、子どもが将来なつて欲しい人間像を、まず設定いたしまして、その人間像に向かって成長するために必要な能力と、それを身につけていくための教育施策の方向性を示すものとして策定したいと考えております。 まず、目指す人間像でございますが、福岡市の子どもたちには、将来、未知の環境変化を前向きに受けとめ、豊かで幸福な人生を送り、持続可能な社会の創り手となつて欲しいというふうに考えてございます。 そこで、人間像を「自分の可能性を信じ、様々な変化や困難に主体的に向き合い、他者と力を合わせ、豊かな人生やよりよい社会を切り拓く人」と定義いたしました。 そして、子どもたちが目指す人間像に向かって成長するために身につけて欲しい力を、三つに整理しております。 まず一つ目は、自分で課題や問題を見つけて、見通しを立て、学ぶ環境を選び、追求していこうとする、「自ら学ぶ力」。 二つ目は、地域社会の一員として様々な人々と関わり、異なる意見がある中でも合意形成を図って、納得のいく解決策を見つけようとする、「他者と協働する力」。 三つ目は、自ら学んだことや、他者と協働して得た経験をもとに、なりたい自分を思い描き、身の回りや社会の変化を前向きに受けとめながら、新しいことに挑戦していこうとする、「未来をつくる力」です。 子どもたちが、これら三つの力を身につけていくためには、子どもを主体とした学びに転換するとともに、様々なニーズを有する児童生徒一人ひとりの状況に応じた支援が必要となります。 そして、そのような学びを実現していくためには、資質と意欲があり、生き活きと子どもたちと接する教員、安全・安心な教育環境、地域や家庭との連携・協働が重要であります。 そのため、これら五つの項目を取組みの基本方針といたしております。 最後に、計画の推進に当たりましては、下段の破線囲みでございますが、児童と教員にとっての「Well-being」、それから、よりよい効果や新しい価値を見いだすための「DX」、この二つを共通の視点として持ちながら、具体の施策・事業に取り組むものとしております。 今後、基本方針に基づいた各施策の方向性の検討を進め、原案を作成してまいります。

	説明は以上でございます。
齊藤指導部長	続きまして、不登校児童生徒への支援の充実について、資料に沿って説明させていただきます。 資料3をお願いいたします。 まず、福岡市における不登校対策の現状について説明いたします。 福岡市では、資料に示しておりますように、不登校の未然防止・早期対応のための支援や、学校内外の居場所づくりなど、子どもの状態に応じた様々な支援策を実施しております。 しかし、これまで、在籍校以外の学校に復帰したいと考える児童生徒への支援策がございませんでした。 そこで、新たな支援策として、学びの多様化学校「百道松原中学校」の、令和7年4月の開校に向けた準備を進めております。 学校の概要につきましては、資料右側をご覧ください。 まず、目指す学校像ですが、「人とのつながりの中で自分の可能性に気づき、新たな一歩を踏み出すことができる学校」としております。 次に、学校の特色についてですが、「チャレンジしやすい学校生活」、「多様に取り組む『学び』の充実」、「人や社会とつながる教育課程」としており、この三つの特色を踏まえた学校にしていきたいと考えております。 施設概要、対象者は資料に記載の通りになります。 次に、授業時数・時制についてですが、資料右下の表の通り、1日4時限授業とし、始業時と終業時には、生徒同士でコミュニケーションをとったり、1日の振り返りを行うなどする時間を設定する予定でございます。 最後に、開校までのスケジュールでございますが、すでに児童生徒、保護者に対して説明会を実施しており、現在は転入学希望者を対象とした面談を実施しております。 今後、授業体験を実施し、それらの結果を踏まえて、転入学検討委員会の中で、その子にとって学びの多様化学校での学校生活や支援が適しているかを検討します。 2月にその検討結果を通知し、転入学手続きを経て転入学が決定し、4月に開校というスケジュールを予定しております。 4月の開校に向け、引き続き、準備を進めてまいりたいと考えております。 説明は以上でございます。
高橋企画調整部長	それでは、ここから10分程度の意見交換に入ります。 進行は高島市長にお願いしたいと思います。 よろしくお願いいたします。
高島市長	よろしくお願いいたします。 まず、教育データ連携基盤の構築についてですが、デモンストレーショ

	ンをしていただいて、素晴らしくよくわかりました。情報を一元的に見ることができるというのは、伴走者としての教員の役割において、子どもを多角的に見ていく上で非常に力になるだろうなど、大変心強く思った次第です。 また、やはり今、教員のなり手が不足しているという中で、いかに教員の負担を減らしていくかという点においても、非常に力になるだろうと思いましたが、現場ではどのような形で受けとめられているのか、お話を伺いたいと思います。
徳成委員	データの連携基盤の構築に当たりましては、9校のモデル校を中心に、現場の先生方の意見をよく聞きながら進めているところです。 子どもたちの状況がリアルタイムで端末から把握でき、即座に子どもたちに声かけができる。そういうところがとても活用しやすいというような高評価を、現場から聞いているところです。 これまで教員は、先輩の指導を受けながら、実践経験を積むことによって、指導力を身に付けたり、対応力の引き出しを増やしていました。しかし、今は経験の少ない若い先生が多くなってしまいました。そういった学校現場にあっては、データ化された情報が道しるべになるということは、とても心強いことだと思っております。 ベテランの教員も、経験によって培われたスキルが、データによって裏付けされるということは、自信を持つことができますし、後輩の指導に役立つということも考えられます。 最後に市長もおっしゃいましたが、教育DXの期待される効果というのは、学校現場の働き方の改善です。引き続き、使いやすく有用なものにしていきたいと考えておりますので、どうぞご支援をよろしくお願いいたします。
高島市長	ありがとうございます。 先生の長年の勘という側面だけではなく、データと両方が必要だと思います。組み合わせていくって大事ですね。 学校の先生方にとっても非常に良いことがわかりましたが、子どもたちにとっては、どのような良い点があるとお考えでしょうか。
原委員	これからの学びとしては、個別最適な学びが求められていますので、教員がデータを活用することによって、子どもたち一人ひとりの学力の変化や理解度に応じたサポートを受けられることが期待できます。 また、子どもたちの心の変化やSOSを見落とさないといったところについては、子どもたちに加え、保護者の方も安心することができ、福岡市の学校に通わせてよかったと、満足度が上がってくるのではないかなと考えています。
高島市長	双方にとってとても良い影響をもたらすということもよくわかりました。

	ちなみに、分析の話があったと思いますが、例えばどこか大学とか専門機関に協力してもらおうというようなことはあるのでしょうか。
石橋教育長	将来的な形にはなりますが、箱崎に新しい研究施設を作る予定としています。そういった中で、始めは、教育委員会において様々なデータを活用して、AI を活用しながら分析をしていきますが、それが発展していく過程で、市長がおっしゃった大学等の民間も含めて検討していこうとしていますので、ぜひ進めていきたいと思っております。
高島市長	アラート機能の説明がありましたが、すごく大事だなというふうに思っていて、データの相関関係がどうあるのかという、そのデータの中で実は浮かび上がってくることもあると思うし、またそういったものっていうのは、もちろんその個人情報と切り離れた上で、どういう傾向があるのかということについて、大学などで先進事例というか研究もあるかもしれないので、そうしたものをうまく組み合わせながら、さらに今後の活用を検討していただければと思います。 それから、次期教育振興基本計画については、推進にあたっての共通の視点として、Well-being と DX、この二つが掲げられていることが特徴ですが、これらは先生方、子どもたちも含めて、大事な視点になってくると思います。 自己肯定感を持って、未来に向かってチャレンジできるよう、子どもたちをどうアシストしていくのか。もちろんバイオリズムもありますから、変化があった時はさっきのデータなどを見ながらですね、みんなでサポートしていくという体制をつくれると非常に良いと思います。 また、DX については、ただ黒板から電子になりましたということではなくって、D、デジタル化だけではなく、X、トランスフォーメーションまでしなければいけません。そこまで踏み込んで変えていくということが大事だと考えています。 そういった部分についての教育委員会の思いとか考え方をお話しいただける方がいらっしゃればお願いします。
町委員	Well-being については OECD が調査を行っていますが、日本の子どもたちは、国際的に見て低い傾向にあると報告されており、残念に思っています。文科省の教育振興基本計画には、子どもたちの Well-being を高めるためには、まず、先生方の Well-being を確保することが必要であり、学校が先生方の Well-being を高める場となることが重要であると、明記されています。まず、先生方の働き方改革を実現して、子どもの伴走者である先生方の Well-being を確保することが、これから本当に大切になってくると思います。 日本は、ものづくりが盛んで、知識や技能が求められてきました。先ほどの次期福岡市教育振興基本計画の説明でも、「受け身の学び」、「画一的な学び」とありましたが、そういった、正確に再現する力が重視されてき

	たわけです。しかしこれからは、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性で「VUCA 時代」と言われていますが、そういった社会を切り拓く力が必要となります。今後は AI やロボットに取って代わられる部分が増えると思います。新しいものを創り出す創造力や、他者と協働してチームで問題を解決する力、こういった能力がより一層求められてくると思いますので、私たち教育委員や学校の先生方を含めて、福岡市教育委員会全体で、力を入れていきたいと考えています。 それから DX について、かつての日本は、インフラの整備不足と指導者側の知識不足が最大の欠点だと言われていました。インフラ整備については、GIGA スクール構想がかなり進んできましたので、他の国に比べても良くなってきています。OECD による生徒の学習到達度調査でも、日本は、学校での ICT リソースの利用し易さの部分で、OECD の平均を上回っています。しかし、各教科の授業での ICT 利用実績は、OECD の平均より低くなっており、他の国に比べると遅れている状況です。先程プログラミングの授業を見て、印象は少し変わりましたが、子どもたちのために、教育委員会全体で、ICT やデータの活用を進めていきたいと思っています。
高島市長	考える方向性が同じで安心しました。学校の先生は、授業やその準備もありますし、福祉的な面も期待されていて大変ですので、DX を進めて負担軽減を図ってもらいたいです。とにかく良い人材に、教育の世界に入りたいと思っていただけるように、働き方改革については、ぜひ真剣に考えていただきたいです。 それから、会食をしたり集まって話をする時に、世代によって違うのが、わからないワードがあったとき、上の世代の人は誰か知っている人に聞いている。一方で、若い人はスマートフォンを出して、話をしながらさっと調べている。要するに、暗記することはもう求められていなくて、スマートフォンがあればすぐわかるようになっている。そういったものを使いながら、どう考えるのかということが大事になっています。人間拡張というように、テクノロジーによって人間の能力を拡張させる時代には、求められる人材も変わってくると思いますので、これから先の未来をどう描いていけるかというふうに、最新の技術を柔軟に受け入れながら、次世代で本当に創造性豊かな子どもたちを育てるために、学校の先生方も自らのアップデートは本当に大変だと思いますが、ぜひ教育委員会の方でリードしていただきながら、また先生の意見をしっかりと聞きながら、前に進めていただきたいと思っています。 それから、不登校児童生徒への支援の充実についてですが、不登校の子どもが増えている中で、新たな選択肢として、いよいよ百道松原中学校が来年の 4 月に開校ということで、子どもたちや保護者の期待が膨らんでいるんだろうなと想像しています。福岡市としては初めての学校で、準備する側も本当に不安がいっぱいかもしれませんが、どういう工夫を考えてい

	るのか、教えていただけますか。
武部委員	この百道松原中学校を希望するお子さんや保護者は、これまできつい思いをされてきた可能性があつて、ものすごく期待をしていらっしゃると思います。先ほど説明があつたように、時間的に余裕を持った時制の中で、人との関わりというものを楽しめるような、その土台を作っていく。これから出会う色々なストレスに対応できる力を育てていきたいというふうに思っております。
沖田委員	不登校といっても色々な子どもたちがいますので、支援するメニューも一人ひとりの状況に応じたものを準備する必要があると思います。その中で、学びの多様化学校として、百道松原中学校が開校することはとても良いことだと思っています。説明会には多くの方が参加されたと聞いています。保護者や子どもたちの期待も大きいと思いますので、きめ細かなサポートが必要かと思いますが、子どもたちが新たな一步を踏み出すことができる学校になるといいなと思っております。
高島市長	ありがとうございます。 本当に子どもたちそれぞれですし、選択肢が増えるというのは非常に期待されている方が多いと思います。この学校ができてよかったなとおっしゃっていただいて、皆さん卒業していただけるように、ぜひ一人ひとりに寄り添った形で進めていただければと思います。 私からは以上です。
高橋企画調整部長	活発な意見交換ありがとうございました。 他に何かございませんか。よろしいでしょうか。 それでは、本日の議題は以上となります。 閉会にあたりまして、高島市長よりご挨拶をお願いいたします。
高島市長	今日は、教育委員の皆さんと有意義な意見交換ができたと思いますし、今どういう方向性で福岡市の教育が進んでいこうとしているのか、大変わかりやすく教えていただいたというふうに思っております。 今、大変複雑な社会になっており、子どもたちに身に付けてほしい内容も変わっています。新しいこともどんどん加わって、先生方も大変だと思いますけれども、働き方改革を進めて、福岡市で教員として働きたいと思っていただけるようにしていただきたいです。そして、子どもたちが未来に向かってすくすくと育ち、必要な能力を身に付け、社会に自信を持って羽ばたいていけるよう、ぜひこれからも、皆さんと方向性を一つに、気持ち一つに、とにかく子どもたちのために、そしてそれがひいては福岡の、日本の未来のために繋がると信じておりますので、今後ともよろしくをお願いいたします。 ありがとうございました。
教育長・教育委員	ありがとうございました。
高橋企画調整部長	これもちまして、令和6年度福岡市総合教育会議を終了いたします。